

社会福祉士実習におけるスーパービジョン実施の現状と課題

—実習指導者、実習生への調査結果から—

○ 長崎国際大学 原田 奈津子 (4588)

浦 秀美 (長崎国際大学・8374)、高島 恭子 (長崎国際大学・4823)

キーワード：社会福祉士実習、スーパービジョン、実習教育

1. 研究目的

社会福祉士実習の実施にあたっては、実習先と養成校が実習内容や実習の到達目標の確認をし、それをもとに、実習プログラムの作成、実習時の巡回指導、帰校日における指導などそれぞれの役割を果たしつつ、協働して専門職を育てるというやりとりを行っている。また、実習において、スーパービジョンの実施が求められており、社会福祉士実習の実習指導者の要件として受講が求められている実習指導者講習会においても、「実習スーパービジョン」に関する研修が丸1日実施されている。しかしながら、実習スーパービジョンの実施についての具体的な内容については、現在、整えられている状況であり、いかに効果的なスーパービジョンを実施するかについては、大きな課題が残っている。特に、スーパービジョンとしての主要な三つの機能（管理、教育、支持）が果たしているのかについて、検討する必要がある。そこで、本研究では、社会福祉士養成における実習でのスーパービジョンに着目し、その現状と課題について明らかにすることを主な目的とする。

2. 研究の視点および方法

今回、実習指導者と実習生への調査から、実習時におけるスーパービジョンの実施について分析していく。

①実習指導者への調査

九州圏内（沖縄を除く）にある介護老人福祉施設を対象とした郵送による質問紙調査を2011年3月末から4月中旬にかけて行った。各施設で社会福祉士実習指導にかかわっている職員1名に回答してもらえるよう依頼をし、回収率は、28.3%であった（802箇所中227箇所）。調査項目は、社会福祉士実習の受け入れ状況、実習プログラムの作成、実習生へのオリエンテーション、実習生へのスーパービジョンといった実習に関するものを中心に、実習指導者個人に関すること（経験年数、保有資格、研修受講の有・無や回数等）についても質問を行った。今回はその中でスーパービジョンに焦点を当て、分析を行った。

②実習生への調査

2012年1月に社会福祉士実習を終えたA大学の学生へ社会福祉士実習と就職意向についての質問紙調査を行った（約30名）。質問項目の実習先の種別、実習先でのスーパービジョンの実施とその内容等を中心に、分析を行った。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針に則り、調査票において、個人の名前や施設名等が特定されたり、個人の評価に利用されたりすることはない旨を明記し、その上での研究協力をお願いしている。調査データについても、適切に保存している。

4. 研究結果

実習指導者への調査では、実習中のスーパービジョン実施については、約8割が実施したと回答した。スーパービジョン実施においては、回数として、毎日実施、実習の前半と後半の計2回、週に1回などが多かった。また、スーパービジョンの所要時間は、30分から1時間の間に集中していた。内容として、「疑問点」「困りごと」「実習目標の達成状況」「反省会」「実習生の気づきと指導者からの気づき」などが主なものとして挙げられていた。定期的に行うもののみならず、実習生が何らかの壁にぶつかっている際に行うものなど、さまざま工夫をしていることが明らかになった。

一方、実習生からみた場合、ほとんどの実習先でスーパービジョンを行っており、スーパービジョンの具体的内容についての自由記述においては、「スーパービジョンによって緊張がやわらいだり、不安に思っていたことを素直に話せたので、すごく私にとって心の支えとなった」「日々、実習を行っている中で感じた疑問をその場で聞くことができなかった際にスーパービジョンという場でその確認ができ良かった」など、スーパービジョンとしての機能を果たしているようすがうかがえた。実習生として大部分は肯定的な受けとめ方を行っているが、一部、スーパービジョンとして機能しきれていないという声も見られた。

5. 考察

社会福祉士実習において、実習指導者から実習生へのスーパービジョンは、実施されつつあるようだが、実習生としては、必ずしも有意義なものとして映っていない場合もある。実習生への調査の中では、「技術・経験からのアドバイスではなく、感情を全面にだしての指導だった。」「時間があまりとられなく、最後に計画のようなものをたてたが、提出しただけになりその後何もなかった。もう少し時間がほしかった。」など、スーパービジョンを行ってはいるものの、形式的で、充実したものになりづらいことも示唆された。その一方で、実習生にとって、実習指導者との出会いで、特に実習スーパービジョンを受ける中で、実習指導者を身近な専門職のモデルとして意識し、福祉の専門職に就く意向が強くなることもみられた。スーパービジョンは、援助者の援助技術と自己成長をより高めるものであり、仕事における適切な処理能力を身に付ける場ともなる不可欠な要素である。今後はより高いレベルでの専門性の研鑽が実習の中で実践されるような実習スーパービジョンの体制づくりについて検討していく必要がある。